



日記「少数意見」



－ 4 事件・事故編－

JUN

2001年11月9日(金) 朝日新聞

朝日新聞は10月29日の歌舞伎町エステの火災のとき焼死した人の氏名を公表しなかった。三年ほど前にテレクラが放火されて客が3人死んだときもその氏名を伏せた。

ところが44人が死んだ9月1日の火災のときは全員の氏名を公表し写真まで掲載した。この火災で焼けた4階の店は当初は風俗店と報道されたが、新聞には飲食店と書かれた。

私は、インターネットでこの店、スーパールーズのサイトを見つけた。そこには顔をモザイクで隠した女性の写真が載っていた。朝日新聞の記者は当然このサイトを見たはずである。そしてこの店がいわゆる飲食店でないことは瞬時にわかったはずである。顔を隠し源氏名で表記された女性たちが自らの氏名と顔写真を新聞に掲載されたくなかったことは一目瞭然であった。それにもかかわらず朝日新聞は風俗店を飲食店と偽ることによって、彼女らのプライバシーを暴いた。これは犯罪である。

事件の次の日の紙面に、記事とは関係なく、唐突に女性の写真と氏名が載せられていた。写真をとれたことを手柄のように思った記者がいたのだろう。それによってどれだけ人の心を傷つけるかに思い至らない愚か者が。

朝日新聞は後日スーパールーズの女性の何人かについて、身の上話を囲み記事で連載した。そのときは女性の名前は仮名だった。朝日新聞はこの段階で仮名を用いることで何を守ろうとしたのだろうか。彼女らが隠そうとした事実はずでに暴露されているではないか。人権に配慮しているかのごときジェスチャーか。

2002年9月10日(火) 9・11と飛翔の夢

去年の9月11日、WTCから多数の人が飛び降りたと言う。生存者がいたという話はない。ひとりで、また2人、3人で手をつないで飛んだ人は、窓枠から足が離れるとき何を思ったのだろう。確実な死か。いや、何人かは、もしかしたら殆どの人が飛翔を念じたのではないか。

誰でも飛ぶ夢をみる。最初は屋根をかするように浮上し、やがて力強くヒマラヤ杉を越え、雲やその上の星ぼしに向かって上昇する。そんな夢を誰でも見たはずだ。

WTCでは何百人もの人々が奇跡を信じて飛び、誰も助からなかった。彼らの最も切なる願いは天に届かなかったのか。そもそも奇跡は存在しないのか。

ジョディー・フォスター主演の「コンタクト」という映画がある。地球外知的生命体（ET）とのコンタクトを描いた作品だ。ETの設計図に従って恒星ベガ星域への移動が可能な装置が建設される。巨大なドーナツ状の二つの物体が回転する中をジョディーを乗せた球体の乗り物が落下し、ドーナツの中心あたりで星間移動のワームホールに入るはずだった。だが、球体はただ海中に落下しただけだった。星間飛行は失敗したかのように見えた。しかし、ジョディーは球体が着水するまでの数秒間に何光年もの旅をし、少女の時に死に別れた父（の姿を借りた異星人）と再会し、そして地球に帰還していたのだ。

WTCから飛び降りた人々が地面に着くまでの数十秒間について我々は何も知らない。その間に奇跡を見た人がいるかもしれない。神を見た人がいるかもしれない。数十秒間に悟りを開いた人がいるかもしれない。いずれにせよその数十秒間の体験は誰にも語られることはない。

いくら思いを致しても、そこで何があったかは私には分からない。しかし、奇跡がなかったとは誰にも言えない。飛翔の夢は実現したかもしれない。そう信じたい。

2003年2月6日(木) コロンビアの事故

日本人宇宙飛行士向井千秋さんは「3度目の飛行の機会があれば乗ってみたい」と言っている。今回の事故の結果、スペースシャトルによる死亡事故の確率は多分100分の1ぐらいになっただろう。それでも行くというんだから宇宙飛行士は勇敢なんだと感心した。でも、考え方によっては、それほどでもないかもしれない。

私の高校のクラスは卒業から30年以内に4人が死んでいる。これはクラスの人数の約10%で、3年間では1%の割合になる。この割合が一般的だと仮定して、もし向井さんの次のフライトが3年先だとすると、それまでに彼女が宇宙飛行と関係なく死ぬ確率は1%ということになる。つまり、向井さんが待機期間中に死ぬ確率と宇宙飛行で死ぬ確率は同じなのだ。

今回のような事故に遭遇して人がよく犯す誤りは、死を色で言えば真っ黒と考え、生を真っ白と考えることだ。本当は生の中にも死は混在していて、真っ白ということはない。死と生の違いは黒と灰色の違いなのだ。

無事生還した宇宙飛行士も1ヵ月後に交通事故で死ぬかも知れず、いずれにせよ永久に生きる人はいない。生きていくということは、まだ死んでいないということではなく、シャトルの打ち

上げ時の傷がその2週間後の運命を規定したように（と現在では言われている）、我々もいずれ致命的となる傷をどこかに持ちながら生きているのだ。

2003年2月7日(金) Quality of Death

シャトル事故の話の続きだが、quality of death ということについて考えてみたい。

生について、快適な生と苦しみの生があるように、死にもいい死と悪い死がある。コロンビアの乗組員の死を悲劇的に受け止めるのが一般的だが、彼らはそれほど不幸なのだろうか。

無事帰還できていたら、彼らは待っている家族と会え、国民的英雄になれた人もいただろう。しかし、無事であった彼らにもやがて死が訪れ、それがどのようなものになるかは誰にも分からない。

日本人の死について考えれば、ガンや他の成人病に冒され入退院を繰り返し、その間家族に苦勞をかけ、やがて病院のベッドが住処となり、回復の見込みがないにもかかわらず薬と器械で延命が図られ、早く死ぬことだけを願う日々を送る。これが日本のみならず現代の文明国の多くの人々の最期の姿だろう。

コロンビアの乗組員の場合はどうだったろう。まず彼らは任務中の死についてその可能性を認識し、そうなるのもいいと覚悟していただろう。1999年にNASA高官がシャトルの本体が失われるほどの事故の確率は245分の1だと言っていたそうで、この数字は商用ジェット機の事故確率が100万回の飛行につき一回であることを比べればとてつもなく大きい。

そのとき乗組員は任務を無事完了し、満ち足りた気持ちで帰還に臨んでいたのだろう。宇宙飛行士を志した人にとってはその時間は人生の最高の時ではなかったか。そして、機体に異常が発生し、やがて帰還が不可能であることを悟ったのだろう。

この最後の数分間を地獄のようだったに違いないと言う人がいる。私はそうは思わない。彼らは旅客機の乗客のように受身の存在ではない。積極的に自然に戦いを挑んだ冒険者たちだった。その挑戦が自然に阻まれ死の結果が生じることは彼らにとっていささかも不名誉なことではない。冒険者にとって北極や南極やエベレストで死ぬことは最高の死ではないか。宇宙飛行士は冒険者ではないというかもしれないが、死に直面したときの気持ちには共通したものがあるに違いない。

最期の数分間は神が与えてくれた時間だったのかもしれない。チャレンジャーの時のように突然爆発してしまうと考える暇もないが、1分でもあれば自分の人生を振り返れる。大きな流星のように光を放ちながら青い地球に落ちていくとき、彼らはなにを思っただろう。そんな彼らを私はうらやましく思う。

2004年4月10日(土) イラク邦人人質事件

人質になったのが3人の「イラク人」だったらどうだったろう。武装グループは同じように3日以内に自衛隊がイラクから撤退しないと人質を殺すと言う。

多分日本政府は困惑したというメッセージを出す程度で何もしないだろう。日本のマスコミも3人のイラク人の家族をスタジオに呼んで特別番組を組むことはない。そして3日後に3人が殺害されても日本政府を非難する声はなくマスコミも騒がない。

今度の事件で人命尊重を叫ぶ人がいるが、その人にとっては人質が日本人だろうがイラク人だろうが変わりはないはずだ。人命が地球より重いなら人質がイラク人だろうが何人だろうが自衛隊は撤退すべきだろう。そうでないと言うのなら、日本人の命は地球より重いとはっきり言うべきだろう。

2004年4月17日(土) 自己責任

イラク人質事件で自己責任が話題になっている。

救出費用を負担させるとか危険地域への渡航禁止が論じられているが、今回のような事件に遭遇した場合の一番明快な自己責任は自力救済ではないか。他人の力に頼らないで自力で脱出する。それが無理ならあきらめて国や他人を恨まない。実際今日のイラクのような場所に出ていく人はそのくらいの覚悟はできているのではないか。

今度の事件でも被害者は国に助けを求めたわけではない。日本政府に助けてもらうくらいなら死んだ方がいいと思っている人だっているだろうし、今度の人質も内心迷惑に思っているかもしれない。そのような気持は尊重されるべきだ。

もっとも国としては放っておくわけにもいかず金と労力を使って救出活動を行う。国の存在意義は国民の生命、財産を守ることにあるのでそれは仕方ない。これは国と国民の間の契約であって

、納税者である以上国からそのくらいのサービスを受ける権利はある。では、そのようなサービスを受けたくない人はどうすればいいか。違った契約を国と結べばいいではないか。たとえば国は危険地域に渡航することに文句を言わないが何かあっても知らないという契約にすればいい。エベレストや南極で遭難した冒険家を自衛隊が出動して助けるわけではないので、国の義務にも例外がある。このような例外を契約で作ればお互いにすっきりするし、免責の証書のようなものを危険地域に行く人が携帯すればゲリラやテロリストも人質に取っても無駄だと思うのではないか。

2004年5月22日(土) SAT

宇都宮の立てこもり事件ではSATが登場した。SATとは警視庁の特殊急襲部隊でテロに対抗することを目的とした部隊である。

20日木曜日夜のテレビニュースが事件解決の瞬間を放送したが、SATはそこで2発閃光弾を投げた。しかし放送によると閃光弾は何れも犯人が立てこもっている部屋には届かず投げた隊員の至近距離で爆発した。一発目はマンションの部屋のベランダに当たって隊員が登ろうとしていた梯子をバウンドしながら落ちてきて隊員の顔のあたりで閃光を放った。あせった隊員は二発目を腰のベルトから引き抜き投げようとしたが彼の手を離れる前に爆発した。

この出来事は事件の結末には影響がなく、新聞も特に取り上げなかったようである。しかし、テロ対策という観点からは重大な問題を提起しているのではないか。もしあの隊員が投げたのが手榴弾だったら彼は2度死んでいる。ロサンゼルスの特務部隊を描いた「S.W.A.T.」を観た直後だったので比べてしまうが、アメリカだったらあのような失敗は許されないだろう。と言うかありえない失態だろう。

SATは組織されてから四半世紀はたっていると思うが、一体どんな訓練をしているのか。SATだけではなく実戦経験のない自衛隊の実力もあの程度ではないかと本当に心配になる。

2004年9月17日(金) 佐世保小6事件最終審判決定

昔、三島事件の後、三島由紀夫はパラノイアだったと断じて失笑を買った精神科医がいた。一般的に精神科医は劣等な者を診断することは出来ても優秀な者を診断するのは下手だ。

80日間に及ぶ精神鑑定の結果を踏まえた決定は、被害者の父親も言うように加害者である女兒

の心の奥底に触れたものではなく下手な作文以上のものではない。この決定は女児の劣等な部分をいくつも指摘するが、彼女の書いたものをいくつか読んだ者にとっては何を根拠にそのような結論に至ったのか不可解である。「自分の中にあるあいまいなものを分析し統合して言語化するという一連の作業が苦手だ」というが、女児のHPの一部でも読めば優れた感性と表現力を否定し得ないはずだ。それは11才という年齢とは関係なく知的な大人のレベルに達している。

笑ってしまったのは、女児は「怒りを抑圧・回避するか、相手を攻撃して怒りを発散するかという両極端な対処行動しか持ち得なかった」というところで、裁判官は何をすれば良かったといたいのだろう。考えるその他の対処方法としては、関係のない第三者に怒りをぶつけるか、他人に愚痴をこぼすか、ということか。耐えられる怒りには一人で耐え、許し難い怒りについては自分の責任で攻撃するのは映画の中の高倉健の生き方で、少なくとも男としては賞賛される行動のはずだった。

決定の中の的外れな性格的欠点の指摘が全て事実だったとしても、それは何れもあの異常な犯行には結びつかず謎は深まるばかりだ。

1箇所興味をひいたのは、女児が「殺害行為に着手した直後解離状態に陥ったことで、自分の行為に現実感がなく、実行行為の大半の記憶が欠損していること」という部分である。解離性障害 (Dissociative Disorder) とは自らが体験している感覚、自らの身体を自分で支配している感覚等の一部が統合を失い感じられなくなることである。その一つは解離性同一性障害でいわゆる多重人格である。ひょっとしたら解離状態は殺害行為の前から存在し、女児は別な人格に支配されていたのではないか。そうでも考えないと女児の人格と犯行が結びつかない。

今回の決定は重大な事実を隠している可能性がある。

2004年11月1日(月) 香田さん殺害

香田さんの行動を、日本の若者にありがちな世の中を甘く見た愚拳だと考えていた。

しかし、昨日DVDで「コールドマウンテン」(アカデミー賞6部門ノミネートの南北戦争を背景にしたラブロマンス)を観て、なにか彼の気持が分かるような気がした。

日本人の多くは、彼のような若者もまた私のような50代も、戦争を体験したことがない。それは幸せなことではあるが、反面何か大事なものを見ていないという欠落感がある。戦争はたくさんの映画の舞台となったが、それは戦争の悲惨さが人々の共感を呼ぶからではなく、悲惨の中に

真の愛や友情があると思われているからだ。「コールドマウンテン」に描かれた純粹で激しい愛も戦争という背景があってはじめて存在感を持つ。日本の生ぬるい日常の中では全ての感情が手応えを失ってあいまいなものになってしまう。

私が行動的な若者であって（そうではなかったが）、戦争がバスで行ける距離にあったら、見に行ったかもしれない。それは、興味本意というのとは違い、また自分が何かしなければならぬという使命感でもなく、自分が存在している意味を知りたいという欲求に基づくものだろう。

彼は、イラクで自分が求めていたものに出会えたのだろうか。

2006年8月19日(土) 切腹

加藤紘一元自民党幹事長の実家と事務所に放火したとされる右翼団体幹部は現場で腹を切って倒れていた。腹からは腸がはみ出していたとのこと。

私が注目したのは、この男の65歳という年齢だった。三島由紀夫は英雄的な死を遂げるには年齢的な制約があると考えていて、その限界を49歳で自刃した西郷隆盛においていた。

この右翼は結局死ぬことはできなかったが、介錯なしに割腹のみで死ぬのは難しい。「一死大罪を謝し奉る」の遺書で有名な阿南陸相はポツダム宣言の最終受諾返電の直前の1945年8月14日の夜陸相官邸で腹を切り、介錯を拒み、翌15日朝絶命した。偶然動脈を切るなどしなければ腹を切っただけではなかなか死ねないのだ。

介錯なしで一人で確実に死ぬには三島が「憂国」で書いたように割腹後首に刀を当てて頸動脈を切る必要がある。しかし、これも腹を深く切った場合には困難な作業になるだろう。

切腹いう自殺の形態はたぶん日本に特有なもので、他の方法による自殺とは性質を異にしている。よく、死んで詫びるというが、首を吊ったり、電車に飛び込んだり、という安易な自殺は責任をとったことになるのか疑わしい。死は誰にでも訪れるもので、それを自ら早めたとしてもいかにほどのことか。金を借りていた人が返済日前に払ってきた程度のことではないか。特に、昨今のイスラム自爆テロは、それで天国に行けると思ってやっているのであれば、責任とは無関係の自分勝手な死ではないか。

切腹の特異な点は、死ぬという目的には不必要な要素が多く、効率的な方法ではないところにある。それは、多大な苦痛を伴うがその割には致命傷にならず、途中で止めようと思えば可能で、怪我をしただけで引き返すことができる。強い意志と体力がないと目的を達することができ

ない。すなわち、切腹は単に死という結果を生ずる手段ではなく、一つの表現行為なのだ。それは単なる終止符ではなく、最後のメッセージなのだ。

59歳になった私は、65歳で腹を切る意志とエネルギーを持った人がいるということに素直に驚いている。

2006年9月18日(月) 麻原奪還テロ

2003年4月22日の日記にも書いたように、土谷ノートというものがあり、そこには麻原は一旦逮捕されるが後に解放され、世界戦争の混乱の中で王国を築くとある。麻原の死刑が確定した今、この予言を実現しようという信者がきっと出てくる。

奪還計画は、常時監視下に置かれている日本ではなく、ロシアなどの外国の支部で練られるだろう。武器の調達やテロリストの訓練も容易だ。奪還の方法としてすぐ思いつくのは人質を取り麻原の釈放を求めるといふものだ。しかし、テロリストの要求を呑まないのが国際的なコンセンサスになっている今日、ジャンボ機を乗っ取っても日本政府は麻原を釈放しないだろう。しかし、盲点がある。

民間人が人質の場合は総理大臣の判断で要求を拒否できるだろう。仮に、総理大臣が人質になっても政府は妥協しないだろう。民間人の犠牲はやむをえないことと了解されている。これがアメリカだったら話は終わりだ。しかし、日本には皇族という人々がいる。現在皇族は22人いるとのことだが、その一人が人質になったら、総理大臣は民間人のときと同じようにテロリストの要求を拒否するだろうか。たぶん皇族の生死は総理大臣がかってに判断できない事柄だろう。やはり、総理は天皇の判断を仰ぐことになるだろう。憲法上そのような義務はないが、勝手に判断すれば自分の命が危うくなる。

では、天皇が人質になったらどうだろう。皇太子が判断できる問題ではない。このような事態に備えて内閣は天皇から事前に指示を受けておく必要がある。いずれにしても究極の選択になり、総理が腹を切るような事態になるだろう。

さらに難しいのは、雅子妃や紀子妃の両親などが人質になった場合だ。民間と皇族の間にある、このようなケースの判断を誰がするのかを明確に定めておく必要がある。

麻原奪還が成功しても、麻原を受け入れてくれる国がなければ目的は達せられない。これも、国と限定するから難しくなるので、今日国に対抗できるテロリスト集団は世界に何十もある。その

どれも何億かの金を積めば麻原を受け入れるだろう。オウムは初めて化学兵器を使ったテロリストグループとして世界的に有名だから協力者を探すのは容易だろう。

このように麻原奪還はclear and present danger だといえる。

2007年7月4日(水) 久間防衛相発言

久間発言は「原爆はしょうがない」発言と簡略化してマスコミは報道しているが、それは歪曲である。

当初の報道では全体の文脈が紹介されていて、記憶によれば下記のようなものだった。

「ソ連は日ソ不可侵条約を破棄して日本を侵略する準備をしていた。米国は日本の降伏が遅れるとソ連が日本を侵略すると思い原爆投下を決めた。戦争が続いていたら北海道はソ連に侵略されて、日本は分裂国家になったろう。それを考えると原爆投下もしょうがないと思っている」

ここで大事なのは、彼が原爆投下に対する絶対的な評価として「しょうがない」と言っているのではなく、原爆投下がなく終戦が遅れ北海道がソ連に占領された場合と比較して、戦争を早期に終結させる手段としての原爆投下は仕方ないと言っているのだ。つまり彼は原爆投下は lesser evil であるという相対的な評価をしているのだ。

この意見に対する反論としては、「しょうがない」とはなんだ！というのではなく、北海道が占領されるのはしょうがないので原爆投下はあってはならない、というものであるべきだ。つまり国土の分割と原爆投下のどちらを選ぶかという問題なのだ。

私の考えがどうかというと、原爆投下がなければ確実に本土決戦になっていて、北海道の占領はありえなし、何より日本は降伏するチャンスを失い民族は全滅していたかもしれない。この考えはクリント・イーストウッドの硫黄島2作品を見てさらに強くなった。原爆投下が無かったら多分天皇のご聖断はなかったし、天皇がストップしなければ日本人は永遠に戦い続けただろう。

このような、歴史のifについて書かれた記事は今回の事件との関係では見ていない。原爆の功罪という議論は禁忌なのだろう。原爆は悪であって絶対に否定されるべきという意見しか許されない。原爆投下にもなんらかの功があったという意見は弾圧される。

しかし、このような立場は広島、長崎で死んでいった人々が全くの犬死であったと言うのに等しいのではないか。原爆の犠牲者は誰のためにもならない無駄な死を遂げたというのか。それはあ

まりにも無惨で死者を冒瀆するものではないか。

久間は、広島、長崎の死は悲惨であったが、そのおかげで日本は分裂国家にならずにすみ、今日の繁栄があると言いたかったのではないか。

2008年10月13日(月) 三浦和義暗殺事件

そもそもロス市警が27年も経って捜査を再開したことをおかしいと思わなければならない。

ロサンゼルスでの殺人件数は最近減ってきているといえ年間500人近くが殺されている。人口比で言えば東京の10倍以上になる。27年前の事件を蒸し返さなくてもロス市警にはやることはいくらでもある。

警察の使命は市民の身体財産の安全を図ることであり、そのために税金を使う。犯罪は完全に撲滅することは不可能で、犯罪者全員を逮捕することも出来ない。限られた人員と予算で効果を挙げるためにはターゲットを絞る必要がある。その観点からロス銃撃事件を見るとどうだろう。

容疑者も被害者もアメリカ人ではない。加害者を罰することを望む被害者の遺族もアメリカにはいない。容疑者は国外にいてアメリカ本土に来る可能性は少ない。この犯罪を処罰することで類似の事件の続発を防止する効果は期待できない。大体アメリカではだれもこの事件について記憶していない。ロス市警の面子にしても日本の司法にゆだねたので放置してもそれが損なわれることはない。当時の捜査官はほとんどが引退している。要するに捜査を再開するメリットはアメリカ側にはない。

むしろデメリットがある。当然のことながら金がかかる。すでにサイパンでの手続きや移送費で税金が使われている。今後の手続きを考えたらとてアメリカの納税者は納得できなかつたろう。さらに日本では解決している事件なので日本の司法当局の面子をつぶす可能性があった。

では何故ロス市警は今になって動いたのか。唯一考えられる可能性はこれが別件逮捕である場合だ。こんな推理はどうだろう。

アメリカのFBIはある国際的な組織による米国に危害を加える陰謀について捜査していた。その捜査線上に三浦和義という人物が上がって来た。検索したところその人物は27年前の事件の容疑者でその記録はロス市警の倉庫にあった。検討の結果この事件を別件として三浦を逮捕しロスで取り調べることが企てられた。FBIとロス市警は協力して三浦を逮捕した。

三浦和義という稀有な人間を考えた場合このような仮説は荒唐無稽ではない。むしろあれだけの犯罪を考え出した（としたら）そのような人物が平穏な余生を送っていると思う方が変だろう。再チャレンジしようと思ってもおかしくはない。

では今回の「自殺」は何か。自殺なわけではない。

前述の三浦を確保しようとした連中を「追求側」と言う。これに対して陰謀を企てている組織を「阻止側」という。阻止側は米国内にも組織がありその一部はロス市警にも潜入している。

追求側は三浦と取引をし、ロス銃撃事件を不問に付すかわりにロスでの尋問に応じるとの同意を得た。それが三浦のロス移送に同意するという心変わりである。阻止側は尋問を阻止するために強硬手段をとる。それは自殺を偽装するまでもない殺人である。

三浦殺害の事実を知った追求側はどうか。真実は言えない。この件は無かったことにして別なルートで捜査を継続するしかない。だから発表はどんなに不自然でも自殺でなくてはならない。この偽装はアメリカの国が絡んだものでロス郡検視局も協力する。真実は永遠に闇の中だ。

2008年10月21日(火) 三浦和義暗殺事件 その2

ギャラゴス弁護士が他殺と断じたので面白くなってきた。

前回は大陰謀説だったが今度は本当のターゲットは共犯者だったという「共犯者標的説」を展開しよう。

ロス銃撃事件の共犯者、つまりスナイパー、は事件当時20代前半だった。それから27年、その男（または女）は50前後になっていてアンダーワールドの大物になっている。いや政界、財界の大物かもしれない。はたまた元々警察官で今は警察の大物かもしれない。とにかく27年という歳月はチンピラを大物にするに十分な時間なのだ。

ロス市警はその大物を追っていたが捜査のなかでその人物がロス銃撃事件のスナイパーだという情報が出てきた。しかし確たる証拠はない。でも三浦が証言してくればその大物を逮捕できる。大物共犯者を捕らえるためにロス市警は三浦を逮捕し尋問しようとした。

三浦はサイパンで自分の処罰が目的ではないと告げられ、共謀罪で有罪になる可能性もあったので司法取引に応じ、移送に同意しロスで証言しようとした。証言をされては困る大物は刺客を使

って三浦を暗殺した。ロス市警は暗殺者が市警の内部にいて公に捜査することで市警内部の問題が表に出ることを恐れ自殺で片付けようとした。

大陰謀説よりありそうだ。

2010年3月20日(土) 地下鉄サリン事件15年

15年前の今日、私が朝家を出る直前、ワイドショーの司会者が、今入ったニュースということで、霞ヶ関駅でシンナーのようなものが撒かれた、と言った。私は家人に、「サリンが撒かれたようだ」と言って家を出て、地下鉄を使わずに出勤した。

それがサリンだということは、新聞をちゃんと読んでいれば容易に知りえた。

前の年の六月には松本サリン事件があり、その年の元旦の読売新聞にはオウムの拠点がある上九一色村でサリンの残留物が検出されたという記事が載り、二月には目黒公証役場事務長が拉致された。そして、事件の5日前には、小さな記事だったが、霞ヶ関駅構内で蒸気を出すアタッシュケースが放置されていたとの報道があった。このアタッシュケースはオウムが作ったボツリヌス菌発生装置であることが後日分かった。

これらの事実を総合すれば地下鉄で撒かれたのがサリンであることは簡単に推測できる。

警察は新聞以上の情報を持っていたはずだから、地下鉄でのサリン撒布は予測できた。柔軟な頭脳があれば。

2011年3月16日(水) 大津波

石原慎太郎が、今回の東日本巨大地震について、日本人の我欲に対する天罰だと言い、批判され、撤回謝罪した。

今回の災害が天罰であるかはさておき、これが天災であることは明らかである。

天災とは、「暴風、地震、落雷、洪水など、自然界の変化によって起こる災害」で、「天」は、「自然」とともに「造物主」、「神」の意味も有する。

クリント・イーストウッドの最新作「ヒアアフター」は、スマトラ沖地震による巨大津波のシーンで始まる。昨日の新聞によると、この映画は上映中止になったと。

フランス人の女性キャスター、マリーは、東南アジアのリゾート（タイのプーケットか）でこの巨大津波に遭遇し、波にのまれ、漂流物に頭を打たれ、溺れた。しかし、彼女は、奇跡的に救助され、臨死体験をする。彼女は、自分が見た美しい死後の世界につき本を書こうと思う。

今回の津波を見て、改めてクリントの映画における津波の意味について考えた。

何故クリントは臨死体験を描くのに津波を必要としたのか。自動車事故でも病気でも死に瀕し生還することはある。

街で買い物をしていたマリーは、津波が道の向こうから迫ってくるのに気づく。津波は椰子の木を「ボキ、ボキ」とへし折りながらやってくる。それはゆっくり近づいてくるゴジラのような。

今回の津波の後の映像で、丘の上で捻じ曲がった鉄塔の列とそこから垂れ下がった電線が印象に残った。映画「ゴジラ」の第一作には、ゴジラが海から上がってきて、海岸線に張られた高圧電線を突破し、鉄塔をなぎ倒すシーンがあった。

ゴジラは、日本人にとっての天災（荒ぶる神）を表現したものだとする映画評論を読んだことがある。

マリーは、臨死体験で、天国を垣間見る。そのような神秘的な臨死体験を出来させる事象は、神の力を連想させるものである必要がある。

クリントは、津波を、圧倒的な力を持った、超越的な存在として描いた。海は意志を持つように動き、人はその前に無力だ。

今回の津波で、多くの人が亡くなり、多くの人が愛する人を失った。突然の死を受け入れることは容易でない。

しかし、死はみんなに来る。例外なくやってくる。事故で死ぬことが悲惨だと思う人は多い。しかし、長患いした後の死はもっと悲惨かも知れない。病院で無理に生かされた後の死が幸せだとも思わない。

最初の石原の言葉に戻るが、彼の言う「天罰」は、今回亡くなった人々が天罰を受けたというこ

とでは勿論ない。我欲にまみれた日本人が罰を受けたということだ。

では、亡くなった人たちの死にはどのような意味があるのか。

「人柱」という言葉がある。ある目的のために（神を鎮めるために）犠牲になる人のことだ。津波が神であるなら、今回犠牲になった人々は神に召された人々だ。彼らの死には意味があり、決して無駄死にではない。

その意味を、残されたものは、考え、理解し、忘れることなく生きていかなければならない。

愛する人を失った方に言いたい。愛する人の死は決して無駄ではない。あるメッセージを我々に伝えるために、特に選ばれて、我々のために死んでいった人たちなのだ。

2011年5月3日(火) ビンラディン殺害

オバマ大統領は正義（justice）が達成されたと言っていた。果たしてそうであろうか。

Justice には正義のほかに裁判という意味もある。例えば、bring sb to justice は「裁判にかける」という意味になる。

ビンラディンは裁判にかけられることなく殺された。裁判で有罪が確定するまですべての人は無罪と推定される。従ってこれは無実の人の殺害ということになる。

米国憲法第5修正は「何人も・・・due process of law によらずに、生命、自由または財産を奪われることはない」と定めている。この「法の適正手続」はアメリカが世界に誇る価値であったはずである。

テレビシリーズ「ザ・ホワイト・ハウス」では、ジェド・バートレット大統領が、テロ支援国の国防大臣を暗殺するエピソードがあったが、彼はその決断をするにつき大いに悩み、殺害後も落ち込んでいた。オバマ大統領は何の矛盾も感じないのか。

米国はテロ国家に成り下がった。